溝上慎一の教育論（動画チャンネル） No20（心理学）

#6 心理学から見ると「非認知能力」はどのような概念か
ー小塩真司先生（早稲田大学教授）にインタビュー

溝上　慎一　　Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

http://smizok.net/
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年幸生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。
＊詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。
公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています

（ご紹介）

小塩真司

おしお　あつし

早稲田大学 文学学術院 教授

名古屋大学教育学研究科修了。中部大学を経て，2012年より早稲田大学，現在に至る。

専門はパーソナリティ心理学，発達心理学

小塩真司（編）（2021）. 非認知能力ー概念・測定と教育の可能性ー　北大路書房

それではご覧ください

非認知能力
―概念・測定と教育の可能性―

小塩真司（早稲田大学文学学術院）

非認知能力―概念・測定と教育の可能性―

- 2021.8.13北大路書房より刊行
- 現在第７刷
- 非認知能力として考えることが可能な１５の心理特性を紹介

15特性

1. 誠実性
2. グリット
3. 自己制御・自己コントロール
4. 好奇心
5. 批判的思考
6. 楽観性
7. 時間的展望
8. 情動知能
9. 感情調整
10. 共感性
11. 自尊感情
12. セルフ・コンパッション
13. マインドフルネス
14. レジリエンス
15. エゴ・レジリエンス

非認知能力の条件

- 認知能力（知能や学力）ではない心理特性
- OECDによる３要素
  - 生産性：何らかのよい結果につながる
  - 測定可能性：何らかの測定が可能
  - 可鍛性：環境の変化や投資によって変化させることができる

→考えてみれば，心理学で研究されているほとんどの心理特性がこれを目指しているのでは？
→このような観点から本を構成

よい結果につながる

- 「よい結果」とは何か
  →well-being？学業成績？職業パフォーマンス？健康？寿命？
- 効果量（予測力）はどれくらいなのか
  →個人の予測に使用可能か。国として効果があるのか
- 認知能力と非認知能力を分けることができるのか

測定可能性

- 心理特性として研究されれば，まず間違いなく測定される
  →信頼性と妥当性
- 社会に応用されたときに何をもたらすのか
  →「測定への執着」が生じる
  →グリットの得点が高いことが評価の対象になれば，本質的ではない「テスト対策」に労力を割くようになるかもしれない

変化させることはできるのか

- 介入による心理特性の変化も数多く研究されている
- 注意点
  1. 効果の大きさはどれくらいか
  2. ある変数の得点だけを変動させることは可能か
     →自己愛を高めずに自尊感情だけを高めることは可能か？
     →完全主義を高めずに誠実性だけを高めることは可能か？

そもそも

- 「学力だけ高めればいい」「頭のよさだけを追求すればいい」という風潮に対するオルタナティブとして非認知能力（非認知スキル）という考え方に注目
- そもそも日本では学力一辺倒ではない教育が行われてきたのでは？
- これまでの教育の中に，すでに組み込まれているとも言えるのではないだろうか